

靈樞講義

九鍼十二原篇第一

【序段】

黃帝問於岐伯曰、
 余子萬民、養百姓、而收其租稅、
 余哀其不給、而屬有疾病、
 余欲勿使被毒藥、無用砭石、
 欲以微鍼、通其經脉、調其血氣、營其逆順出入之會、
 令可傳於後世、必明爲之法令、
 終而不滅、久而不絕、
 易用難忘、爲之經紀、
 異其編章、別其表裏、
 爲之終始、令各有形、
 先立鍼經、願聞其情、
 岐伯荅曰、臣請推而次之、令有綱紀、始於一、終於九焉、請言其道、

【一段】

小鍼之要、易陳而難入、粗守形、上守神、
 神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、
 刺之微、在速遲、粗守關、上守機、機之動、不離其空、
 空中之機、清靜而微、其來不可逢、其往不可追、
 知機之道者、不可掛以髮、不知機道、叩之不發、
 知其往來、要與之期、粗之闡乎、妙哉工獨有之、
 往者爲逆、來者爲順、
 明知逆順、正行無間、
 迎而奪之、惡得無虛、
 追而濟之、惡得無實、
 迎之隨之、以意和之、
 鍼道畢矣、

【二段】

凡用鍼者、虛則實之、滿則泄之、宛陳則除之、邪勝則虛之、
 大要曰、徐而疾則實、疾而徐則虛、
 言實與虛、若有若無、

察後與先、若存若亡、
 爲虛爲實、若得若失、
 虛實之要、九鍼最妙、
 補寫之時、以鍼爲之、
 寫曰迎之、迎之意、必持內之、放而出之、排陽得鍼、邪氣得泄、
 按而引鍼、是謂內溫、血不得散、氣不得出也、
 補曰隨之、隨之意、若妄之、若行若按、如蚊虻止、如留如還、去如絃絕、令左屬右、
 其氣故止、外門已閉、中氣乃實、
 必無留血、急取誅之、
 持鍼之道、堅者爲寶、
 正指直刺、無鍼左右、
 神在秋毫、屬意病者、
 審視血脉者、刺之無殆、
 方刺之時、必在懸陽、及與兩衛、
 神屬勿去、知病存亡、
 血脉者、在脰橫居、視之獨澄、切之獨堅、

【三段】

九鍼之名、各不同形、
 一曰鑱鍼、長一寸六分、
 二曰員鍼、長一寸六分、
 三曰鍤鍼、長三寸半、
 四曰鋒鍼、長一寸六分、
 五曰鈹鍼、長四寸、廣二分半、
 六曰員利鍼、長一寸六分、
 七曰毫鍼、長三寸六分、
 八曰長鍼、長七寸、
 九曰大鍼、長四寸、
 鑱鍼者、頭大末銳、去寫陽氣、
 員鍼者、鍼如卵形、措摩分間、不得傷肌肉、以寫分氣、
 鍤鍼者、鋒如黍粟之銳、主按脉、勿陷以致其氣、
 鋒鍼者、刃三隅、以發痼疾、
 鈹鍼者、末如劒鋒、以取大膿、
 員利鍼者、大如釐、且員且銳、中身微大、以取暴氣、

毫鍼者、尖如蚊虻喙、靜以徐往、微以久留之、而養、以取痛痺、
長鍼者、鋒利身薄、可以取遠痺、

大鍼者、尖如挺、其鋒微員、以寫機關之水也、九鍼畢矣、

【四段】

夫氣之在脉也、邪氣在上、濁氣在中、清氣在下、

故鍼陷脉則邪氣出、鍼中脉則濁氣出、鍼大深則邪氣反沈、病益、

故曰、皮肉筋脉、各有所處、病各有所舍、鍼各有所宜、各不同形、各以任其所宜、
無實實無虛虛、損不足而益有餘、是謂甚病、病益甚、

取五脉者死、取三脉者恆、奪陰者死、奪陽者狂、鍼害畢矣、

【五段】

刺之而氣不至、無問其數、刺之而氣至、乃去之、勿復鍼、

鍼各有所宜、各不同形、各任其所爲、

刺之要、氣至而有效、效之信、若風之吹雲、明乎若見蒼天、刺之道畢矣、

【六段】

黃帝曰、願聞五藏六府所出之處、岐伯曰、

五藏五腧、五五二十五腧、六府六腧、六六三十六腧、

經脉十二、絡脉十五、凡二十七氣、以上下、

所出爲井、所溜爲榮、所注爲腧、所行爲經、所入爲合、

二十七氣所行、皆在五腧也、

節之交三百六十五會、知其要者、一言而終、不知其要、流散無窮、所言節者、神氣之所遊行出入也、非皮肉筋骨也、

【七段】

觀其色、察其目、知其散復、一其形、聽其動靜、知其邪正、

右主推之、左持而禦之、氣至而去之、

凡將用鍼、必先診脉、視氣之劇易、乃可以治也、

五藏之氣、已絕於內、而用鍼者、反實其外、是謂重竭、重竭必死、其死也靜、治之者、輒反其氣、取腋與膺、

五藏之氣、已絕於外、而用鍼者、反實其內、是謂逆厥、逆厥則必死、其死也躁、治之者、反取四末、

刺之害、中而不去、則精泄、害中而去、則致氣、精泄則病益甚而恆、致氣則生爲癰瘍、

【八段】（十二原）

五藏有六府、六府有十二原、

十二原出於四關、四關主治五藏、
 五藏有疾、當取之十二原、
 十二原者、五藏之所以稟三百六十五節氣味也、
 五藏有疾也、應出十二原、
 十二原各有所出、明知其原、觀其應、而知五藏之害矣、
 陽中之少陰、肺也、其原出於大淵、大淵二、
 陽中之太陽、心也、其原出於大陵、大陵二、
 陰中之少陽、肝也、其原出於太衝、太衝二、
 陰中之至陰、脾也、其原出於太白、太白二、
 陰中之太陰、腎也、其原出於太谿、太谿二、
 膏之原、出於鳩尾、鳩尾一、
 肓之原、出於臍中、臍中一、
 凡此十二原者、主治五藏六府之有疾者也、

【九段】

脹取三陽、飡泄取三陰、
 今夫五藏之有疾也、譬猶刺也、猶汚也、猶結也、猶閉也、
 刺雖久、猶可拔也、汚雖久、猶可雪也、結雖久、猶可解也、閉雖久、猶可決也、
 或言久疾之不可取者、非其說也、
 夫善用鍼者、取其疾也、猶拔刺也、猶雪汚也、猶解結也、猶決閉也、疾雖久、猶可
 畢也、言不可治者、未得其術也、
 刺諸熱者、如以手探湯、
 刺寒清者、如人不欲行、
 陰有陽疾者、取之下陵三里、
 正往無殆、氣下乃止、不下復始也、
 疾高而內者、取之陰之陵泉、
 疾高而外者、取之陽之陵泉也、

二〇二〇年九月十三日

【疾と病】

・『漢辞海』

「一般の病気は疾といい、重症を病といったが、後世ではその区別が薄れた。」

・『漢辞海』に引く『釈名』積疾病

「疾病の疾は、疾（はやい）である。客氣（外部の邪氣）が人に中（あ）たるさまが急疾（急速）なのである。」

・『論語』述而篇「子疾病」（子疾^やみ、病なり）（先生が病気になり、病状が重くなった）

〔九鍼十二原篇での使われ方〕

病：一般にいう病気

〔熟語〕疾病・病者

疾：①病気

〔熟語〕疾病・痼疾・久疾・疾雖久（慢性病）

②急証

*「五藏有疾」は①か②か。

③速やかに 徐而疾則實、疾而徐則虚、

【虚と実：一対の概念。洗練された治療法】

無實實無虚虚、損不足而益有餘、是謂甚病、病益甚、

（実を實してはいけない。虚を虚してはいけない。不足を損し、有餘を益するのを甚病といい、病氣は益々ひどくなる。）*虚・実と有餘・不足は別概念だが、ここでは同じになっている。

実：（形）堅実、充滿の状態。

実する：（動）強める、締める、膨らます。補法ともいう。

虚：（形）虚弱、空虚の状態。

虚する：（動）弱める、弛める、へこます。瀉法ともいう。

五藏の有餘=機能の亢進（≠実）（同じ意味なら、固い・ふくらんでいる）

⇒亢進を抑える治療=瀉法ともいう

五蔵の不足=機能の低下(≠虚) (同じ意味なら、軟弱である・へこんでいる)
⇒賦活化する治療=補法ともいう

陽気有余は熱

⇒陽気を減らす(損) ⇒瀉法ともいう

陽気不足は冷

⇒陽気を増やす(益) ⇒補法ともいう

陰気不足は熱

⇒陰気を増やす=補法ともいう→熱いのに補法

陰気有余は冷

⇒陰気を減らす⇒瀉法ともいう。→冷えてるのに瀉法

以上総合すると、虚実補瀉は、抽象概念であり、

虚・実は、多くの意味を含んでいるので誤解を招きやすいし、

補・瀉も、多くの意味を含んでいるので誤解を招きやすいので、

軽々しく、虚実補瀉ということばを使ってはならない。

運用に当たっては、一つ一つを具体化しなければならない。

*医学では、虚は病的状態(不良)であるが、『孫子』では軍備不足を虚といい(不良)、反対に『老子』では私心が無いのを虚という(良)。よって、文脈から、虚実を読まなければならない。

【現実的には：虚と実是一对の概念では無い、ドロ臭い治療法】

凡用鍼者、虚則實之、滿則泄之、宛陳則除之、邪勝則虚之、

〔虚的〕虚則實之(強める)

〔実的〕滿則泄之(もらす)

宛陳則除之(のぞく)

邪勝則虚之(弱める)

『素問』陰陽応象大論

故因其輕而揚之。因其重而減之。因其衰而彰之。

(軽いのは浮かせ。重いのは減らせ。衰えているなら明瞭にする。)

形不足者。温之以氣。精不足者。補之以味。

(肉体の不足は、食べ物の気で温補する。精気の不足は、食べ物の味で補養する。)
其高者因而越之。其下者引而竭之。中滿者寫之於内。

(高いのは上から漏らし、低いのは下に引いて尽くし、中満は内側から除け。)
其有邪者。漬形以爲汗。其在皮者。汗而發之。

(邪が有るなら身体を漬けて発汗させよ。邪が皮膚に在るなら発汗させよ。)
其慄悍者。按而收之。其實者散而寫之。

(素速いものは制止させよ。実ならば散らして瀉せよ。)
審其陰陽。以別柔剛。陽病治陰。陰病治陽。

(陰陽剛柔を分け、陽病は陰を治し、陰病なら陽を治す。)
定其血氣。各守其郷。

(血気を安定させ、そのエリアを管理せよ。)
血實宜決之。氣虛宜〔制／牛〕引之。

(血実なら出血せよ。氣虚は導引させよ。)

[虚的]

形不足者。温之以氣。(温補する)

精不足者。補之以味。(補養する)

氣虛宜〔制／牛〕引之。(導引する)

[実的]

其高者因而越之。(もらす)

其下者引而竭之。(つく)

中滿者寫之於内。(のぞく)

其有邪者。漬形以爲汗。(発汗させる)

其在皮者。汗而發之。(発汗させる)

其實者散而寫之。(散らして除く)

血實宜決之。(血を出す)

【補瀉の大原則】

補：体内へ入る：飲む。食べる。息を吸う。聞く。

瀉：体外へ出る：二便での排泄。発汗。射精。出血。津液。皮脂。嘔吐。咳嗽。
息を吐く。話す。

【原】

①：源(はじめ)。病気のはじめ。

②：たずねる。偵察する。病気の徴候(きざし・前触れ)を偵察する。

③：偵察ポイント＝原穴(治療する経穴)

④：動脈拍動部(原穴)

⑤：原穴（「膏之原」「肓之原」に拍動があるか？）

『素問』八正神明論

三部九候爲之原、九鍼之論不必存也、

（三部九候が「たずねる」を実行する。実行すれば、病気の徴候時点で治療できるのだから、症状が出てから使う九鍼の使い方の論議は、不必要なのだ。）（徴候を見つけられずに、症状が出てしまったら、当然に九鍼を使う。九鍼を否定しているわけではない。）

『難経』八難

諸十二經脉者、皆係於生氣之原、

（十二経脈は、すべて生気の源に連なっている。）

所謂生氣之原者、謂十二經之根本也、謂腎間動氣也、

（生気の源とは、十二経の根本であり、腎間の動気をいう。）

此五藏六府之本、十二經脉之根、

（ここが蔵府の根本であり、十二経脈の根元でもある。）

呼吸之門、三焦之原、一名守邪之神、

（呼吸の本当の出入り口であり、三焦の源であり、邪を防ぐ神ともいう。）

故（生）氣者人之根本也、

（生気は人の根本である。）

*消化管による吸収は、小腸で90パーセント、胃・大腸で10パーセントが行われている。それらに栄養を供給する動脈、小腸部分がメインなので、腎間の動脈という。邪を防ぐというのは、腸内細菌をいうと思われる。

『難経』三十八難

所以府有六者、謂三焦也、有原氣之別焉、主持諸氣、

（府に六有る理由は、三焦があるからで、三焦は「原」の気の一部を有し、諸々の気を主持す。）

『漢書』芸文志・方技略

原人血脈經絡骨髓陰陽表裏、以起百病之本、死生之分、

（人の血脈・経絡・骨髓・陰陽・表裏を^{たず}ねて、百病の原因や死生の区別をほり起こす。）

【病気の徴候を偵察する】

【急性熱証の徴候：望診】

『素問』刺熱篇

肝熱病者、左頬先赤、心熱病者、顔先赤、脾熱病者、鼻先赤、肺熱病者、右頬先赤、腎熱病者、頤先赤、病雖未發、見赤色者刺之、名曰治未病、（肝熱病は左頬が先に赤くなり、心熱病は顔^{ひたい}が先に赤くなり、脾熱病は鼻が先に赤くなり、肺熱病は右頬が先に赤くなり、腎熱病は頤^{あご}が先に赤くなる。このように、まだ発症していなくても赤色をみつけて治療する。これを未病に治すという。）

【原穴診：五藏病の徴候：望診】

五藏有疾也、應出十二原、

（五藏に疾があれば、手応えが、十二の原穴に現れる。）

未覩其疾、惡知其原、

（五藏の疾を見ていないのに、どうして治療する原穴がわかるのか。）

（五藏の症状が出ていないけれど、（原穴を偵察して）治療する原穴を知ることができる。

）

明知其原、覩其應而知五藏之害矣、

（治療する原穴がはっきりと知ることができるのは、原穴の手応えで五藏の害を知るからである。）（覩：偵察する。）

【動脈拍動部】

『素問』平人氣象論

胃之大絡、名曰虛里、貫鬲絡肺、出於左乳下、其動應衣、

（胃の大絡は虚里といい、横隔膜を貫き、肺に絡み、左乳下に出る。その拍動は衣服に伝わる。）

『千金方』

人迎、一名天五會、在頸大脉、動應手、

（人迎は、天五会ともいい、頸動脈のところであり、拍動が手に伝わる。）

【三部九候診＝五藏原穴＋α】

『素問』八正神明論

三部九候爲之原、九鍼之論不必存也。

（三部九候診が基本である。ここで病気の徴候を見つけ早期に治療するのであるから。症状が出てから使う九鍼の用い方の論議は、ここでは不必要なのだ。）（徴候を見つけられずに、症状が出てしまったら、当然に九鍼を使う。九鍼を否定しているわけではない。）

上部（頭頸部）

→三候 浅側頭動脈（聴会）・顔面動脈（大迎・迎香）

中部（手部）

→三候 橈骨動脈（太淵・合谷）・尺骨動脈（神門）

下部（足部）

→三候 後脛骨動脈（太溪）・背側中足動脈（太衝）・足背動脈（衝陽）